



宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

武幸

ひめまつ 目次

(第二十八号)

表紙絵……島田武幸

題字……石川木魚

写真……写真部・新聞部

巻頭言

教育者のあるべき姿

校長 須賀 淳

1

▽前理事長
前校長

須賀友正先生御夫妻の一周忌を迎えて

校長

須賀 淳

4

追悼詩

栃木県文化功労者 手塚 武・講師 河住 玄

河住 玄

5

※活力ある生徒会活動を(新生徒会会長に就任して)

大城 則子

8

※反省を新たな課題に (任務を終えて思うこと)

小池まゆみ

9

へ声

『友だち』について

10

「友は保つことが大切」

三年 広瀬真奈美

「互いに信じ合える人」

二年 甲斐 裕子

「親友とは理解と信頼」

三年 吉村 啓一

「かけがえのない友の声」

二年 君嶋 昭子

「素直に心開ける友を」

三年 荒井 光子

「あなたは私の友だち」

二年 戸崎由美子

「血の繋がりに無き家族」

三年 斉藤 瑞枝

「一生の友を選ぶ」

一年 岡田 典子

「無情の友情有形の友達」

二年 蜂巣真由美

「友情は努力で育くむ」

一年 政岡 恵子

「私は友達、いっぱい」

一年 金田 佳子

*心に強く響くもの(校内読書感想文入賞作品)

21

「白い人・黄色人」

三年 川俣かなり

「若草物語」

二年 手塚 綾子

「人間失格」

三年 和知 剛

「ころろ」

一年 今井 隆子

「野火」

三年 湯本 康子

「塩狩峠」

一年 柴田 和江

「紀ノ川」

二年 吉岡 恭子

「車輪の下」

一年 菊地 泉

「サーカスの馬」

二年 戸崎由美子

「塩狩峠」

一年 神山 仁美

◎石橋湛山記念論文入賞作品 『情報化社会と私』

三年 桑野みどり

33

◎イトーヨーカドー懸賞
作文入選作品

『私の一番大切にしていること』

三年 小池まゆみ

37

◇作品集

39

詩

〔三年〕寺門 久子・土佐谷康代・佐藤 千秋・高木 典子・川井佐智子・〔二年〕吉田 光余

〔二年〕河田 周子・天山 明美・池田 直子・関口 律子・金子 静江

短歌

〔三年〕石川季代美・金子真由美・佐藤 則子・岸田 美保・池田納里子・松原 早苗

俳句

〔三年〕藤田 恭子・内山 光子・石川季代美

〔二年〕柴田 隆弘・今村 賢司

〔一年〕福田 明美・池田 純子・二木 牧子・佐藤 祥江

作文

〔三年〕山崎 仁美・〔二年〕伊藤 愛子・〔一年〕柴田 和江

職員コーナー

和久 誠・山村 剛・佐伯 典彦・関 宣子・松浦 一雄

関西・四国・大洗・日光の旅

〔三年〕藤平 智・福田 昌代・〔二年〕伊藤 潤子・岡村 幸重

〔一年〕田代 昌継・箕輪 陽子

キャンブ裏磐梯

〔二年〕奥田 裕子・海老沢 香

わがホームルームの紹介

委員会・クラブ活動この一年(風紀・保健・美化・文化部・運動部)

学園ニュース(PTA総会・各科研修会・球技大会・弁論大会入選作品他)

56
61
63
88
108

国際理解・国際協力のための 高校生の主張コンクール入選作品 『今・平和を思う』

三年 今村 容子

学友会の奉仕活動(旭・星が丘・陽北・鹿沼・栃木他)

124

告知板(万里子先生教育委員に、各種礼状の数々他)

130

附中コーナー

附属中学校この一年

「附属中学の仲間たち」

中一年 木原 大亮

「附属中学に入学して」

中一年 山内 普子

141

五十八年度生徒会報告

●各種検定・就職状況他

●職員住所録

151 148

●編集後記・奥付

●校史と校章

156

144



いま巣立ちゆくなつかしの学び舎(3月)



風香る大洗海岸でのひととき(5月)



皆さんの励ましを受ける激励会(6月)



ことし初めて附中生を迎えて対面式(4月)



楽しい思い出の数々修学旅行(5月)

学園の スナップ

宇都宮短期大学附属高等学校

校歌

作詩 菅谷徳次郎
作曲 野原幸夫

Musical score for the school song, including lyrics in Japanese and musical notation.

ふ なら の た ー か ね を は る か に あ お ー ぎ
に な も に し ー げ れ る ひ め か ま つ こ ま ー つ
ま か な び の み ち す じ は ま さ き くろ あ れ と
か た み に ち ー か い て い そ し み は け む
お ま し な え び の に ー わ こ こ け に と め う た け れ
あ わ れ と め う で た こ ー の ま な び や

校歌

一 二 荒の高嶺を 遙かに仰ぎ
学びの道筋 まさしくあれと
かたみに誓いて いそしみ励む
教への庭こそ げに尊けれ
あわれ尊 この学びや

二 庭面に茂れる 姫松小松
変らぬ操は 千代万代と
かたみに祝いて いそしみ励む
学びの庭こそ げに芽出度けれ
あわれ芽出度 この学びや



キャンプはジンギスカンで……(7月)



初めて附中生も参加の学校祭(11月)



バトン、吹奏楽両部……花を添える(11月)



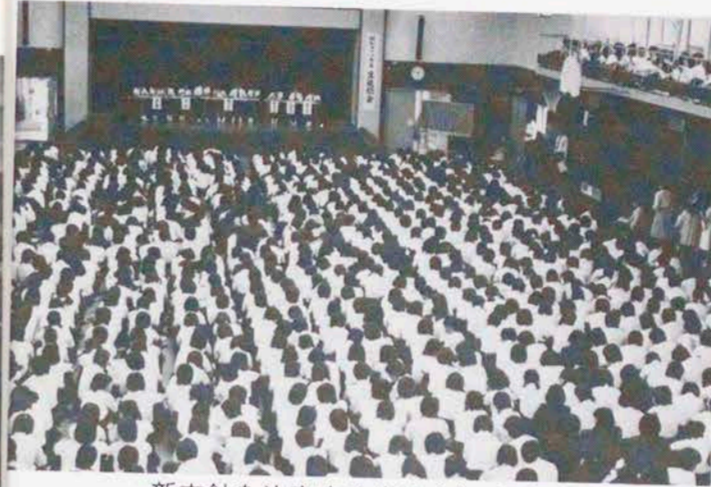
熱弁振う、クラス代表弁論大会(11月)



附中生のサンドイッチマンも(11月)



この日の大食堂は大にぎわい(11月)



新方針を決定する生徒会(6月)



熱戦、若さをぶつけて球技大会(7月)



アタック！息づまる一瞬(7月)



応援がとび、若さと若さの激突(7月)



P T A で近況説明の校長先生(6月)



キャンプの夜彩る炬火赤々と……(7月)

巻頭言

教育者のあるべき姿

校長 須賀 淳



本文は、校長先生が下野新聞の「日曜論壇」に執筆されたものです。非常に大きな反響がありましたので、ここに転載させていただきました。

(「ひめまつ」編集部)

過日、栃木県政経懇話会で、東大名誉教授の大石泰彦教授の「日本の教育を考える」と題する講演を聴いた。翌日の本紙(注、下野新聞)「平和塔」でも取り上げられたが、その趣旨は「親も子も、教師も学校も文部省も、国民全部が教育の有り方を考え直さなければ、二十一世紀のわが国に明るい展望はない」ということで、参会者の大きな共感を呼んだ。その中で、現在の校内暴力など学校教育の問題に触れ、学校の責任者である校長や教師に対する厳しい批判もなされた。長年、教育行政の仕事に携わり、また現在教育現場の一員でもある私にとって、そんなに堪えないところであった。教育においては、何といても直接その任に当たる教師の責任は大きいのである。私は職員には常



庶務
今井 隆子



議長団
亀田 成美



議長団
岩上 悦子



議長団
藤波 雄一



議長団
川田 俊男



こちら和文タイプの検定です
(10月)



一人で出来るかな、着付け教室
(10月)



リズムに乗り合唱コンクール(11月)



私たちの手料理ですと試食会(11月)

出席した父兄もすっかり感心(11月)



会長
大城 則子



副会長
石嶋 繁美



副会長
亀山 晴恵



会計
山越 昌子



会計
川上 裕子



庶務
佐藤 優子

に生徒達と人間的な接触を深め、一人一人の生徒を大切に、親切に、キメ細かな指導を行うよう指導しているが、「教育は人なり」といわれるように、先生と生徒の温かい人間関係、心と心の触れ合いによってこそ、ほんとうの人間教育が行われるのである。

ところで、NHKでは先ごろ「中学生・高校生の生活と意識調査」を行った。その一部はテレビで放映されたが、その中に「好きな先生」という項目がある。それによると、生徒から見ただけの先生のベスト5は、

第一位	ユーモアがある先生	二四・五%
第二位	どの生徒にも公平に接する先生	二一・八%
第三位	きびしいが根は温かい先生	二〇・四%
第四位	悩みごとと一緒に考えてくれる先生	一四・八%
第五位	授業がわかりやすい先生	一一・三%

となっている。

私は教育委員会などに頼まれて先生方の研修会で話をする機会があるが、その折に、私なりに「好かれる先生」、「嫌われる先生」として、それぞれ次の十の項目を挙げている。

「好かれる先生」では、①生徒と一緒に勉強していこうとする意欲がある。②迫力のある授業を展開する。③ユーモアを解する。④授業の中で体験談や生き方を話す。⑤何事にも筋を通し、優しさの中にも厳しさがある。⑥何でも話せる雰囲気がある。⑦クラスのまとめについても心を配っている。⑧折に触れてアドバイスをしてくれる。⑨生徒に与えた課題は必ずしめくくる。⑩言葉遣いに気を配る。

この反対に、「嫌われる先生」では、いささか差し障りもあるが、①自己本位。②一方的。③言い出したら絶対に生徒の話を受けない。④特定の生徒をひいきする。⑤忙しいからあとにしるという。⑥話し合いがない。⑦何でもめんどくさがる。⑧放任主義、自主性に任せると称して指導しない。⑨くどすぎる。⑩ものをもらう。これらは「好きな先生」の裏返しである。

以上、表現は異なるが、NHKの調査と内容は同じであろう。生徒たちは生徒なりに、非常に厳しい目をもって先生を見つめているのである。

NHK第一位のユーモアがある先生とは、決して単なるジョークや駄じゃれを意味するものではなく、人間としての幅の広さ、奥深さを生徒は求めているのである。

そして生徒は、先生の授業を受けながら、その先生の背後にあるもの、例えば体験とか生きざまといった人間性を常に見つめており、このことから、悩みごとと一緒に考えてくれる先生、体験談や生き方を話してくれる先生を求めているのである。そのためには、先生は生徒とともに学び、時には生徒の手を引き、時には生徒に手を引かれながら、人間探究の道を進む教師でなければならぬのである。

二宮尊徳翁の教えに「水車の理」というのがある。水車は水の中に入って初めて回る。しかし、水の中に全く没してしまったのでは回らない。そうかといって水から上ったままではから回りするだけである。この水を生徒に置きかえたとき、水車である教師はいかにあるべきかを知ることができよう。

教育基本法にもある通り、「人格の完成をめざす」教育に従事する学校の教員は、「自己の使命を自覚し、その職責の遂行に努めなければならない」のであって、そのためにこそ「教員の身分は尊重され、その待遇の適正が期せられなければならない」ということになっているのである。

教師の使命はまず重いかな、である。

前理事長・前校長 須賀友正先生の一周忌を迎えて
同夫人 ハナ子先生

代表者が墓所に参拝
在りし日の両先生のご遺徳偲び



▶友正、ハナ子両先生の墓前に香をたむける
校長先生ご夫妻と職員・生徒代表



友正先生



ハナ子先生

須賀友正先生とハナ子先生がお亡くなりになつてから早いもので、すでに一年余が過ぎました。友正先生は昭和五十七年七月、病床につかれ療養にとめられました。が、「先生、ぜひ、もう一度お元気なお姿を」という私達の祈りもむなしく、二か月後の九月一日逝去されました。そして、さらに二か月後の十一月二日には、あたかもその後を追われるように、こんどはハナ子先生が逝去なされたのです。同年九月五日には友正先生の学園葬が本校体育館で荘厳に執り行なわれ、またハナ子先生の葬儀は十一月五日に宇都宮市東端田の須賀家菩提寺、成高寺でしめやかに営われました。友正先生は享年八十歳、ハナ子先生は七十六歳でしたが、おふたりは共に本学園創立者須賀栄子先生のご遺志を継がれ、五十年の長い間、本学園の発展に尽力してこられました。とくに第二次世界大戦下の昭和二十年七月、宇都宮大空襲では本校の校舎、教材のすべてを焼失するという悲運に見舞われ、全くのゼロから再出発して今日の隆盛を見るに至るまでの友正先生のご苦勞は筆舌に尽せぬものがありました。またハナ子先生はこの間、自ら教壇にも立ち、よく友正先生をお助けしてこられました。友正先生の一周年をお迎えた昨年九月一日のご命日には、淳校長、万里子先生のご夫妻と共に本学園職員生徒の代表が宇都宮市の八幡山一隅にある友正、ハナ子両先生の墓所に香をたむけておふたかたのご冥福をお祈りいたしました。ここに関係者の方々から寄せられた追悼の詩を掲げて改めて両先生のご遺徳をしのびたいと存じます。

めぐり来し一年の後の思いに

栃木県文化功労者 手塚 武

有りと有る
季節の花々に
つまれて
香わしき花のしとねの人となり
お二人のひつぎが それぞれ 数百の人々の
瞳に見送られ
ひっそりと旅立って行かれてから
早や一周忌を迎えること
になりましたのですね
のですね。

いま 私の書齋から見る
お隣りの庭の風色に
全く変わりはありません。
南側は ことしも茗荷の群につづいて
露の葉っぱが大きな傘を拡げ
真ん中にある
炎え立つ緑の松の秀群はむらに近く
すくすくと伸びた一叢はむらの芙蓉が
一点 そして二点

真紅の花を咲かせています。

一輪は高く

一輪はやや低く 控え目に

彩りだけは鮮烈に 惜しみなく紅の
はむらはむらを炎え立たせているのです。

期せずして 幼ない孫たちは言いました。

—— どうして白い花がないの 白い花と

二色あるといいな

—— おじいちゃんのと おばあちゃんのと。

私は答える

おふたりとも一歳の赤ちゃん だから

どちらも赤くていいんだ

だが 来年は三歳 だから白い花も咲かせるに

そういあるまいよ

また 幼ない孫たちは言いました。

—— おじいちゃん おばあちゃんの行って

しまったところ よっぱどいいところなんだよね

だって 帰ってきた人いないんだから

竜宮のようなくちなんだよ きつとね。

まったく ぴったりです。

ここで私は話題を変えました。

私にとって優しい死も
幼ない子供たちに対しては
その生 その喜び その夢 諸々の珍らしい
物象と知恵 またその愛 匂いやかな愛をこそ
望み かつ与えなければならぬのだから

小雨を残したまま 夜が重いとばかりをおろし
はじめました。

雨のなかを
しめやかな足どりで 小止みなく近づいてくる
お二方の「面影」だけが

くつきりと浮彫されてくるのです。

手をさし伸べれば 触れ合い 握り合える

近間と思われるのに

ふしぎなもんだな

どうしても手がとぎません。

そして せつかく 私になつかしいお二方との
触れ合いのために貯えておいた

この郷土の この時代に生きた 最も香ぐわしく

最も賢明な魂に寄せる讃歌を よりよく伝える

ことのできない もどかしさを

しみじみと味わっているのです。

——それがもう がんばれないんだよ。
あのことは最後に遺して旅立っていった姉。

だが 私には
友正兄共々 いまもなおあの部屋に寝ている

ように思われてならないのです。

—— 帰る家は在っても 帰る力がない
これが死です。

死は厳しく

わたしたちの思いは

日毎に打ち沈みつつ

哀しみは夜毎に募るばかり。

夜空の星を悉くはらい尽くして

—— 悲しみは潮のごとくに

声もなく のびひろがり

交わり合うのです。

思い出はあふれて遠し秋鏡

(昭和五十八年八月)

おふたりの一周忌をひかえて

元本校教諭)

須賀友正先生一周忌謹賦而典

講師 河住 玄

須賀友正先生の一周忌に謹んで賦して(作詩すること)
典す(お供えする意)

先生捐館已年周

先生捐館(一家の主人の亡くなること)して已に年周
(一周忌のこと)

知遇洪恩未克酬

知遇の洪恩(洪は広大の意)未だ酬ゆる克はず

旧憶新思空耿耿

旧憶新思(新旧のいろいろな思い)空しく耿耿(あき
らかに感じる意)

老桜葉落学園秋

老桜葉は落つ学園の秋

学園ニュース

会長に松岡氏(再選)

P T A 総会開く

昭和五十八年度P T A総会は、六月四日午前十時から本校講堂で開かれた。太田先生の開会のことばにつづいて音楽科生徒による校歌「二荒の高嶺を遙かに仰ぎ……」の斉唱ののち、松岡祐祥会長と須賀校長のあいさつに続き任期満了の役員(別項)、瀬野尾前副会長ら四十三人にそれぞれ表彰状と記念品が贈られた。

会務報告があり議事に入ったが、昭和五十七年度の事業並びに決算報告、昭和五十八年度の予算案並びに事業計画案は原案どおり万場一致で承認され、新年度の会長として松岡祐祥氏が再選され、副会長以下の各役員も次のとおり決った。

- (昭和五十八年度役員)
- | | |
|------|----------|
| 会長 | 松岡 祐祥(再) |
| 副会長 | 篠崎キミエ(再) |
| | 渡辺 衛(再) |
| | 金子 長次(新) |
| | 増淵 隆(新) |
| | 青木 基(新) |
| 会計 | 六川 彦次(再) |
| 監査 | 柿沼 忠位(新) |
| | 平泉 忠之(再) |
| | 杉本 俊三(新) |
| 顧問 | 野沢 靖信(新) |
| 常任委員 | 須賀 淳(再) |
| | 中野 林蔵(新) |
- ら百二十名

なお総会終了後は会場を本校会議室に移して支部長会が開かれ、夏休期間を利用しての各支部総会について具体的な話し合いを行なった。

- (表彰を受けた前役員)
- △副会長 瀬野尾 巖、同(古河支部長)仁平 通、同 菊地重雄、会計長 峯彦太郎△日光支部長 遠藤利雄、南河内支部長 伊沢貞夫、氏家支部長 高橋成治、真岡支部長 日下田 智、野木支部長 安藤 広、間々田支部長 岩本忠雄、結城支部長 秋元将雄、今市支部長 長沢智行、上河内支部長 小野三郎、豊郷支部長 井上寿夫、下館支部長 青森一郎、石橋支部長 平田ミエ、鳥山支部長 渡辺正作、高根沢支部長 加藤 昇、喜連川支部長 佐藤鉄四郎、壬生支部長 小林義平、西那須野支部長 大武利夫、鹿沼支部長 根本利八郎、国分寺支部長 柳田 攻、益子支部長 平塚勝一、茂木支部長 松山三男、上三川支部長 田中信正、市貝支部長 加藤芳永、栗野支部長 大貫俊、二宮支部長 保坂鉄雄、塩谷支部長 齊藤和雄、黒磯支部長 阿部英一、芳賀支部長 小林 勲、田原支部長 植松正雄、陽西支部長 鈴木 勇、宮の原支部長 野口武弘、国本支部長 福田良一、旭支部長 長金古次郎、雀宮支部長 溜池春吉、姿川支部長 中村保久、星が丘支部長 針谷正、瑞穂野支部長 増淵恵映、陽南支部

長五味潤義人、横川支部長 箕輪三男(敬称略)

猛暑の中で質疑応答

各地で熱心にP T A支部総会開く

「P T A総会に出席できなかった父兄のために学校側が各地区のP T A支部に向いて、学校の近況説明や父兄との面談を行うP T A支部総会は、今年も八月一日から七日間にわたって開かれた。

一日から三日までは本校講堂で宇都宮市内の各支部、そして四日からは矢板地区を皮切りに県内の八地区を訪れて総会をもった。会場はいずれも地元各中学校の好意で利用させてもらった。いつもながら最も暑い時なので、父兄も職員も汗だくの中のことだったが、出席率は極めてよく、熱心に父兄は耳をかたむけ、また、わが子たちの進路や学習、生活指導について真剣な質疑がかわされた。

の伝統、校風、学園生活、進学、就職など各分野の具体的な内容に深い感銘を受けていた。

また今年席上、生徒による「私の進路」「親に願うこと」の作文をその生徒自身が読んでテープに収め父兄にお聞かせしたところ、生徒たちの気持がよくわかった、子どもたちも、こんなに立派な考えを持っているのか——など大へん好評を拍した。

なお支部総会の日程は次のとおりだった。

- 八月一日・午前：一条、陽西、宝木、作新地区・午後：陽南、泉が丘、城山、鬼怒地区△二日・午前：陽東、晃陽、横川、宇大附属地区・午後：星が丘、陽北、瑞穂野地区△三日・午前：宮の原、旭、姿川、国本、清原地区・午後：雀宮、豊郷、上河内、古里、田原地区(以上いずれも会場は本校講堂)
- △五日・午前：西那須野、黒磯、矢板、塩谷地区(会場矢板中)・午後：日光、今市地区(会場今市中)△六日・午前：鹿沼、栗野地区(会場鹿沼中)・午後：栃木、安蘇、足利、佐野、芳賀、西方地区(会場栃木南中)△八日・午

父母に願うこと

普通科 三年十組 飛田 雅子

幼い頃の父母のイメージは、一つの思い出に繋がっていきます。まだ幼稚園に上ったか上らないかの頃、母はよく、指を交互に結ばせた私の小さな手を、自分の手の中に入れて話をしました。丸い爪がすっと伸びた白い手の優しさは、厳しく叱られた思い出よりも、強く母親のイメージとして残っています。父の場合もまた、手の事が思い出です。真冬に一緒に歩いていた時、私が「こんなに冷たくなくなっちゃった。」と言ってさし出した手を、暖めてやろうとしてポケットから出した父の手が厚く大きかったことを今でもはっきり

憶えていて、それがそのまま、父のイメージに繋がっています。

小さい頃は、もちろん私だけでなく、ほかの誰もが、ただ、父親を父親として見、母親を母親として見て、後をつけて歩いていました。時には、反抗したり、不満をもらしたりしながらも、ただ真っすぐに見つめ、それだけの中で生きてきました。しかし、中学に入り、高校へ進むと自分というものが解かり、ほかが見えはじめて、視野も行動範囲も広がり、そうはいかなくなってきました。尊敬する人も両親から他に移り、親との外出は、二度に二度は友達に替わってしまいます。やがては家を出て、結婚をし、これまでとは異なった新しい家庭を築いてゆきます。親子ということに変わりこそないけれども、これをつないでいた太い直線には、やがて、枝のように細い線が生じて、単純だったものが複雑になってしまいます。でも、それが「成長する」ということなのでしょう。

いつだったか、母と食事の後かたづけをしながら、話はずんで、私が小学生の頃の話になった時「あの頃が一

番よかったのかしらねえ。」と母がつぶやいたことがありました。次第に大きくなり、独り立ちをはじめ、やがては巣立って行ってしまふ。その寂しさに対する、それは母のつぶやきだったに違いありません。

何かの本で、「子にとって親は大きくなるまでの肥料だ。育ってしまえばすべて吸い取られ必要のなくなってしまうものなのである。」ということを読んだことがあります。そうではないと私は思うのです。子供だけが親を踏み台に成長していくのではなく、親もまた一緒に成長してゆくものではないのでしょうか。ただ子は親に近づく、相対することのできる一人の人間となってきたに過ぎないのだと思います。そして、それがその真の「成長する」ということなのだと思っております。

今では、私の手は大きくなって、母の手の中に包まれることもできず、また父の手をさほど大きく感ずるようなこともありませんが、そのかわり今の私の手は、この手なりに何かを感じられるでしょう。小さい頃に私が父母か

ら与えられたものを少しでも返せるようにならなくてはならないのですから。

だから、お父さん、お母さん。取り残されたなんて思わないで下さい。これからは、小さい頃には渡せなかった悲しいことや辛いことも、私に分けて欲しいのです。そして、親と子としてだけでなく、人間と人間として、二十一年目には二十年目の、三十年目には三十年目の、お互いに成長してきた年月の分だけあの頃では理解できなかったことも理解し合ってゆきたいのです。人間としての本当のつき合いは、まさにこれからののですから。

私の進路

家政科 一年 佐藤 優子

今からちょうど一年ぐらい前でしようか、私は、進路のこといろいろなと考へはじめました。「自分にふさわしい道は何なのか。」と悩んだりもしました。そして、幾日も考へたすえに、この宇短大附属高等学校に進学することに決めたのでした。私は、自分なり

にいろいろと考へた末に自分の意志で本校に進学したつもりです。

でも、やっこの学校に入学したと思ったら、こんどは次の進路について考へなければなりません。「高校に入学したばかりで進路のことなんて考へるのは、まだ早い。」と思う人もいるかもしれない。しかしそう思っているうちに三年になり、あわてて進路を考へるということになってしまいかもしれません。私は、今のだんかいは、一応就職を希望しています。でもまだ、具体的にどのようなどころということまでは決めていません。

自分の進む道を決めるということは、簡単なことのようにも思いますが、なかなか決まらないものです。進路を決めるにあたって、先輩や先生方から、いろいろな意見やアドバイスを聞くのもそれは、それでいいことだと思います。人から聞いたりして「なるほど。」と思うこともあると思うからです。実際に、私自身も中学校のとき進路を決めるについて担任の先生と、自分にはどういう進路が向いているのか、この高校はどうかなど、いろいろ

相談しました。そして、先生からお聞きしたことで大変参考になったこともありました。今でもそのことで、担任の先生には、大変お世話になったと感謝しています。でも、進路というのは、自分が進む道であって、他に誰が進む道でもありません。あの人がいったから、私もあそこの学校に行く、などという考へは、大変なまちがいだと思います。だから最終的には、自分の考へを一番大切にしなければならぬと思うのです。自分の考へというのを、しっかりと持っていなければなりません。

自分の考へを持つということは、やはりじっくりと時間をかけてまず自分自身をよく見つけなければならぬということです。そして、自分自身をよく知ったうえで進路を決めるのが一番いいと思うのです。自分の将来の進路を決めるということは、自分の一生を決めることになるからです。

私はこれからの、高校生活において一日一日を大切に、自分自身をよく見つけてゆきつもりです。そして一日も早く、はっきりとした自分の進路を決めたいのです。その進路が決まった

ら、その進路にむかって「今、自分のやることは何なのか。」ということ考へて、一生懸命がんばってやっていきたいと思ひます。

商業科後援会役員研修旅行日記 研修に語らいに和気あいあい

第七回商業科後援会役員研修旅行が八月二十一日(日)・二十二日(月)の両日にわたり、福島県土湯温泉ホテル向滝で行なわれた。二十一日午前九時学校を出発、宇都宮インターチェンジから東北自動車道を私達を乗せたマイクロバスはみちのくの人口白河インターチェンジで小休の後、須賀川インターチェンジまで快調に走り、国道四十九号線の静かな家並と緑の中をあぶくまめざしてバスは進む。時計はいつのまにか十二時をさしている。

あぶくまレストハウスで昼食をとる、小休した後あぶくま洞に向うが附近は車や見学者で混雑し、なかなか洞穴の入り口まで行かれず番を待つこと約一

時間列を作りやっ入り口にたどりつくことができた。

エアーカーテンをくぐると、もうそこには冷気がみなぎり別世界、自然の彫刻美に接した。中世代(自世紀九千万年(一億年前))およびその後何回かの地殻変動により変成され、陸化された結晶質石灰岩で地下水に溶かされてつくられた洞穴である。洞内は月の世界、竜宮殿、滝根の斜塔、白銀の滝、そして圧縮は滝根御殿である。鍾乳石、石筍、鍾乳膜石等長い年月がかかって形成されたものである。



あぶくま洞での記念撮影をする
商業科後援会の一行

温泉のホテル向滝に向う。ホテル向滝に到着したのは午後五時五十分。休むまもなく六時から四〇一室で研修に入る。

今回も例年通り、会長挨拶、事務局挨拶に続いて、信夫先生より商業科各学年の目標や技術検定、さらに指導方法等について説明があった。そして、最後に伊沢先生より一年生の意識調査にもとづき現代っ子の考え方や恒例になった経済状況の分析と見直し、そして進路指導の方針と指導の実態等進路指導講話などが行なわれ、活発な質疑応答のうちに約一時間にわたる有意義な研修が終った。

午後七時から会場を移し、新鮮な山菜や鮮魚料理に舌づみ、みをうちながら談笑、隠し芸等で夜の更けるのも忘れるほどで約二時間の親睦会もアツという間に終り自由時間となる。

自由時間は三々五々、湯舟につかる者、マイク片手に美声をほこっている者、また、子供を話題に語り合う者等さまざまな人間絵巻をくり広げている。その間も夜は刻一刻とふけて行く。

翌日、八時朝食、九時出発との予定

見学の後、バスは磐越東線の線路を右に左に五、六回横切りながら船引町で国道二八八号線に入り三春人形、三春駒の発祥地として知られる三春町から郡山へ、さらに国道四号線を北上し安達ヶ原の鬼婆の伝説で知られる安達ヶ原観世音堂へ。お参りをした後、住職に依頼して宝物である巻物や出土品(鬼婆が使ったという出刃や人の肉を煮たという鉄鍋等)等をまのあたりに見ながら伝説に耳を傾けた。

住職の話では、京都のある高貴な家に姫が生まれた。乳母は、姫を大事に育てていたが、突然病に臥してしまった。医師を招いていろいろ手をつくしてみたものの、病状はいっこうに良くならず、易者を招いて相談したところ、「姫の病は妊婦の生肝を飲ませなければ治らない」ということであった。乳母は、生肝を求めて全国をさまよい歩き、安達ヶ原に住みついた。

ある秋の日、伊駒之助・恋衣と名の若夫婦の旅人が宿を求めて立ち寄った。その身籠っていた恋衣が、旅の疲れから急に産気づき、伊駒は、薬を求めて人里へ走っていった。乳母は恋衣に襲いかかった。苦しむ恋衣は、「母を探して歩いているのです。」と言いついで息絶えた。乳母は恋衣の持物を調べ、身につけていたお守からわが子であるとわかると、そのまま狂ってしまった。それ以後、宿を求めて立寄る旅人を次々と殺し、生血を吸い、肉を食らって、安達ヶ原の鬼婆と怖れられるようになった。

その後、修業の旅僧が安達ヶ原の道に迷いこんな恐ろしいところとも知らず一夜の宿をかりると老婆が裏山の薪をとってくる間奥の部屋を見たらぬと言った。出ていった。不思議に思っ旅僧がこっそり覗いてみると人骨が累々としていた。驚き恐れて逃げだすと老婆が鬼婆となつて追いかけてくる。旅僧は、今はこれまでと一心ふらんに如意輪観音像に祈願し、その仏の力によって鬼婆を倒したという。

家政科後援会研修旅行同行記

あぶくま洞を訪ねる

今年これまでの泊りがけの研修会を日帰りにして「みなさん一人でも多くの方が気軽に参加できるように」ということで、八月二十一日の日曜日をを利用して福島県を選びましたが、たまたま商業科後援会(一泊二日)も第一日は同じ場所でした。

当日は、前夜来の雨が朝まで尾を引いてパツとしない大天気だったが、午前八時学校を出発するころには雲も切れ、薄日もさしはじめたのです。

さいさき良し——一同心も軽く平泉忠之会長のご協力によって手配されたマイクロバスは、一路目的地の福島県滝根町にあるあぶくま洞へ。
矢板のインターチェンジから東北高速道に入る。車中まず平泉会長からあいさつがあり、楽しいきましようとする持参の品々が配られて、さっそく親睦カラオケ大会の幕あけです。

通り、ホテル向滝を出て、バスは右に左に曲りくねった山道をくだり、小雨降る中、五色沼(毘沙門沼)に着く。ここで休憩したのち、バスは松原湖に向い松原湖畔のレストハウス目黒で昼食をとる。昼食後、最後の見学地野口記念館を見学する。ここは若干時間余有があつたので自由時間をとり、買い物をする者や近くの会津民族館(ここは、会津の民家を集め、会津地方の資料が豊富にあり、会津の昔をしのぶことができる)をのぞく等、思い思いに一刻を過ごしていた。

バスは、郡山インターチェンジから東北自動車道に入り一路帰途につく、盛夏の太陽のもと溜池運転手のハンドルさばきに身をまかせ、宇都宮(学校)に午後五時十分到着し無事解散した。
参加者……

- 父兄側 柿沼忠位、荒川郁子、荒川トキ、竹沢洋子、市川道子、久保井アヤ子、金田晴子、黒後 元、郷間智代山越 誠、大橋ツネ、真船利子、新井美代子、亀和田富江、早川十久二、板橋 真、溜池春吉、山本文子。
- 学校側 伊沢雪夫、信夫享(伊沢記)



あぶくま洞での家政科後援会の人たち

皆さん、それぞれマイクをにぎって「十八番」をご披露に及ぶ。那須高原サービスイリアで休憩ののち、車は快調に目的地に到着。
夏休み最後の日曜日とあって、入り口は長蛇の列、約三十分あまり待ってやっと内部に到着した始末。
このあぶくま洞は昭和四十四年九月、釜山鉱山跡の切羽で発見されたもの。その後、地元の研究グループをはじめ全国各地から集って来た研究者や探検家の努力によって全長二千四百メートルの大鍾乳洞であることがわかった。

その一部があぶくま洞と名づけられ、四年後の昭和四十八年六月から滝根町の手で観光施設の一つとして公開されています。

内部はほぼ南北に伸び、これをつくり上げた地下水は仙台台地の東側を流れる谷川の水が流れ込んだものである。上部洞、中部洞、下部洞の三層からなり、地下水の水位変化の歴史を物語っています。

まことに大きな規模の鍾乳洞で、内部は別世界、夏でも平均気温九・五度。それぞれの形やムードに応じて若人の穴、洗心の池、白銀の滝、竜宮殿などと名づけられています。とくに滝根御殿はこの洞最大のもので、長さ三十メートル、幅十五メートル、天井までの高さ二十メートル。一見に値します約一時間。

なお参考までに、内部は湿気が多く、足場が悪いから、ヒールの高いものはさけ、簡単な雨具でしすくをさけるとよいでしょう。

近くのドライブイン大滝根で昼食。午後は黛田の池を回る予定だったが、平泉会長が道路状況を調べたところ、

混雑がひどく相当時間がかかり、帰校は予定より大幅におくれ夜七時ごろになつてしまうというので、急に予定変更。帰途のコースにある歴史の町・三春の歴史民族資料館と三春人形のふるさと・デコ屋敷を訪れる。ところが、この「ハプニング」がかえって参加者に喜ばれました。

三春町は明治初期の自由民権運動に尽力した多くの志士が生れたところで貴重な歴史資料が残されており、またデコ屋敷は地元特産の郷土玩具ペコ（馬の人形）やコケシ人形の生産過程も見学でき、文字どおり研修の成果を収めることができました。

午後六時帰校、事故もなく楽しい一日だった。参加者の皆さん、ごくろうさまでした。（戸室記）

…参加者…
父兄側 釜辺金次郎、菊地良平、平泉忠之、相沢房子、磯俊雄、加藤一美、岩崎慶一郎、池森利夫、会田美津子、高塚祐子、金子和子、渡辺善作。
学校側 和久誠、戸室文子、永島利子、阿部保子、菊地園美。

インターアクト

他校生と交流深める

北海道研修旅行に参加して

伊 沢 雪 夫

しらのみの寄せて騒げる
函館の大森浜に
思ひしことども



インターアクトの研修旅行に参加した一行
(トラビ・スチヌ修道院前で)

これは歌人石川啄木の詠んだ短歌であるが、函館は海岸線の美しい街であり、坂の街であり、エキゾチックな街でもあるがこれらにもまして私の注意をひいたのは、トラビスチヌ修道院である。この修道院は一八九八年（明治三十一年）に設立された。
「わたしについて来たい者は、自分を捨て、毎日自分の十字架を背負って、わたしに従って来なさい。」ルカ9:23（新約聖書）の言葉に従い、自分のすべてを捧げ尽くしたいという、強い意志の女性たちが営まれている共同団体がトラビスチヌ修道院である。

この修道院の売店で私は、シトー会（トラビスチヌ）「修道女の生活」という小冊子を買求めた。それによると、修道女の生活は、聖ベネディクトの戒律に基づいて営なまれ、常に心の目で神を見つめ、日常生活のすべてを神のみ前で、実行するようにと教え、一般に孤独と沈黙のうちに祈りながら働き、働きながら祈る生活、主キリストの弟子として、キリストの愛によって結ばれた共同体の中で、すべての人の救いのために生涯奉仕し続ける生活

である、ということが述べられていた。このような修道女の姿勢——祈りと労働を手段として神と人々に奉仕しているインターアクトクラブの精神と似ているように思えて、今回の北海道研修旅行の中で最も強く私の心をとらえたのであった。

信仰心をもった人が神のうちに生き、主キリストの心を自分の心として生きているように、私達は自分をよく見つめ、他を思いやる心を大切にしながら、無私の精神で奉仕活動ができれば、本当にすばらしいことだということをおためて考えさせられた。

四日間の研修旅行はあわただしさの中にも日程通り消化された。
札幌百景園での第二五地区インターアクトクラブとの交歓会は、インターアクトの歌を斉唱したのち、ジンギスカン料理に舌づゝみをうちながら、第二五地区ガバナー竹山源一氏、同インターアクト代表松沢英志君の歓迎のことばに続いて、第二五地区大島団長、同インターアクト代表中村彰宏君のあいさつがあった。クラブ紹介の

のち、交換留学生のスピーチがおこなわれた。来日わずか六か月というのに日本語で上手にあいさつしたのはいささかおどろいた。最後に各学校の郷土の特色などをユーモアをまじえながら紹介があった。

この合間をぬって、交換留学生達を中心に両地区のインターアクター達の資料の交換や活動の様子などについて活発な意見がとりかわされ、国際間の交流がより以上に深まったのではないだろうか。短い時間内での交換会ではあったけれど非常に意義深いものだったと信じている。

札幌での夜は、自由行動ということ各校ごとに夜の札幌を見学しながら食事をとった。

私達もホテル脇から、市営の地下鉄（車輪がゴムタイヤ）に乗り、すすきのの駅で下車し有名なラーメン横丁で本場札幌ラーメンをたべた。さすがに本場の味は最高である。

横丁は人々の往来がはげしく、あちこちの店から呼び込みの声がかかり活気がある。ラーメンをゆでる湯気がせまい路地いっばいに立ちこめている。

自校という枠にこだわらず、節度ある態度、また、機敏な動作で他校生との交流を深め、予想以上の成果をおさめることができた。これらの経験は今後のクラブ活動にかならずや生かされることと確信している。

未筆ながら、この旅行の責任者として日夜心を配ってくれた大島団長をはじめ、各地区ロータリーアンの方々、各校顧問の先生方にお世話になったことを感謝するとともに、この紙面を借りてますますのご活躍を期待するものである。

この研修旅行には、宇都宮西ロータリークラブの高橋輝雄氏と本校からは君嶋昭子、砂川弘美、飯沼かおり、大野明子、笹沼陽子、石井真紀、斉藤弘枝、立枝 薫の八名が参加した。

私は今回、この研修旅行に参加する機会に恵まれ、インターアクトについても多くの理解を得ることができたことを大変感謝している。ともすると目の前に立つ積極的に奉仕活動をしなればと痛感した者である。

熱い敢闘精神に燃え

— 運動部の激励会開かる —

去る四月二十七日、緑の風かおる中で運動クラブ激励会が行なわれました。その日は、春のはじめとはいっても日差しが強く、汗をかきくらしいでしたが、主役の運動部員はさすがにびしょとっていました。

まず、しっかりした足どりで選手入場。プラスチックの奏でるリズムに乗って現われた各クラブの紹介。トップは陸上部。男四人、女八人で、優秀な新入部員を迎え、毎日黙々と走っているそうです。昨年は入賞者二名だったが今年も一人でも多くの入賞者を出すことを目標にしているとのこと。

次は弓道部。県内ではこの部強いの声が聞かれるとか。昨年は年間の各大会に殆んど入賞、関東大会も三回ほど出場しています。今年はその関東大会が地元で開かれるため、出場権を目指し頑張っています。昨年は関東大会、その次は体操部。

インターハイ、国体と出場しました。内容はあと一歩だったのですが、新人大会では優勝し、大会への意気込みを見せています。

次はバスケットボール部。新入生の加入で計二十名の大世帯になり、毎日三時間、練習に汗を流しているそうです。新人大会ではベスト4には入れなかったが、今回は、優勝候補の宇女商とベスト4をかけて、苦しい戦いになりそうです。

次のソフトボール部は、活気に満ち、ソフトボールが大好きという部員ばかり、その活気を今度の関東大会に注いで、力を十分発揮し頑張っていたきたい。

最後は剣道部でした。男六人、女十人、八人で武士道という言葉に胸を、関東大会、インターハイに向けて自分達に悔いの残らぬよう全力で当たっていくことでした。

どのクラブも技術更新に意気込んでいます。校長先生の激励のあと、出席者全員で若い力と校歌を唱いましたが、とりわけ彼らは力いっぱい唱ったように見えました。選手退場のときの彼ら

の後ろ姿には、運動にかける熱い血がみなぎっているように感じられました。

桜花の下で対面式

— 初の附属中新入生も参加 —

生徒会が主催するわが宇都宮短期大学附属高等学校の伝統ある年間行事の一つ、対面式が昭和五十八年四月九日第一限目に桜の花が咲き誇る校庭で行われました。

今年、本校に入学したのは、高校生八百四十六名と今年新設された附属中学生四十二名で、対面式はまず新入部生の代表のあいさつから始まりました。

新入部生は、私たちが入学した頃と同じ様に制服を着てもあどけなく、代表も高校生になった喜びと不安とが同居している様子で、私たちはあいさつの途中息づまる事があると余計可愛らしく思い耳をかたむけました。

新中学生は、新入部生よりもさらにあどけない。私たちより五つも年が下なので私たちの見る目も初めは、可愛

らしい印象しかありませんでしたが、新中学生のあいさつは、予期に反して非常に立派なもので、希望に満ちあふれていて新入部生にも負けないほどのものでした。

そして在校生代表である生徒会長のあいさつ、新入生はどんな気持ちで聞いていたのでしょうか。代表のあいさつは、さすがに在校生らしく優しいお姉さんの様に感じたのではないかと思います。

最後に校長先生から新入生を激励するお言葉と、在校生にはおほめのお言葉と新入生と仲よくするようにというお言葉をいただきました。

対面式とは、新入生と在校生との初めのふれあいの場として設けられた式ですが、今年もまことに意義あるものになったと思います。



編集後記

「ひめまつ」第三十八号ができました。

「ひめまつ」は昭和二十二年の創刊。県内最高水準の生徒会誌を、という意気込みで、今は退職されてしまわれた、栃木県文化功労者 手塚 武先生の手により誕生しました。それから三十余年、手塚先生が大きく育まれたこの偉業を寺内恒夫先生が引継がれ、張り切っておられました。体調をくずし、やむなく業なかばにして退職されてしまいました。しかし今年から、長年新聞社に務めておられ、編集に精通していらっしゃる和久 誠先生を顧問に迎え、大谷 武先生、新井晃子先生と共にこれまで培われてきた伝統の上に新風を吹きこもう、と私達を全面的に励ましてくださったのです。

表紙絵は、長年「ひめまつ」のために献身的に尽くして下さっている島田武幸先生に今年もかいて頂きました。先生の作品はもう、おなじみになりましたね。バックナンバーを並べてみますと、さながら「小さな個展」といったところですね。実は先生の父上、島田訥郎先生も「ひめまつ」の表紙に絵をかいてくださった方なのですが、おしいことに昨年暮におなくなりになりました。紙上をおかりしてお悔やみ申し上げます。

私達が懸命につくりあげた「ひめまつ」ですが、完璧、とまではいかなかったかもしれません。しかし生徒会会員一人ひとりの思い出に残る「ひめまつ」となってくれることを望んでやみません。どうか、隅から隅まで目を通して下さい。

(編集委員長・柿沼律子)

「ひめまつ」第三十八号 (非売品)
昭和五十九年三月一日印刷発行

宇都宮市睦町一番三五号

宇都宮短期大学附属高等学校

編集人 顧問 大谷 武

発行人 生徒会長 大城 則子

印刷所 宇都宮市鶴田町三三九の一

株式会社 ヤマゼン印刷

印刷人 山本 征一郎

〒320 TEL 0286(34) 四一六一〜三番

発行所 宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

校史と校章

創立者、須賀栄子先生は、様々な苦勞を克服され、女子に最も適切な技芸を教授し、その時代と境遇とに順応すべき実際の婦人の養成を教育の主旨とし、共和裁縫教習所から、共和裁縫女学校、宇都宮須賀女学校、宇都宮女子高等職業学校と校名を改め、発展されていきました。その後を須賀友正先生が受け継がれ、学制改革により、宇都宮須賀高等学校へ改正され、更に、宇都宮短期大学を設置し、高校も宇都宮短期大学附属高校へ改名致しました。しかし、昭和57年の9月1日にお亡くなりになられ、その後を受け継がれたのが、現校長先生でいらっしゃる須賀淳先生です。先生は、宇都宮短期大学附属中学校を設置し、様々な功績をあげ、現在に至っております。

我が校の生活目標である「一人は一校を代表する」という言葉の意味は、生徒一人一人が、それぞれに、本校生徒としての価値を知り、その価値を自分で見捨ててはいけないという事です。「一人」という人間の価値を見逃すことなく、それぞれの価値を自覚することこそ、人間の大きな喜びであり、幸福への素材であるとし、学校は、その価値のあり場を認識して、そのあり方を勉強する場であるというのが、須賀栄子先生のお考えで、私たちは現在、この言葉を胸に、本校生徒としての価値を認識し、生活しています。

本校が、現在に至るまでは、いくつかの校章がありましたが、現在使われている校章の由来は、須賀学園の「ス」をカタカナ文字で表わし、3つ合わせたものです。